

我がまち 自慢

26

吉沢地区 編

住みよいまちづくり推進協議会の各地区の広報委員の方が、地区の取組みなどを紹介します



手作りのステージで、さまざまな催しが行われます

笑顔と交流の輪が広がる

よしざわ祭り

地域住民の交流と親睦を図り、住みよいまちにしようと吉沢地区で開催されている「よしざわ祭り」。市制施行100周年を記念して、平成元年に始まり、毎年約4000名が参加するなど、盛大に行われています。

吉沢小学校の校庭に設営された、手作りのステージでは、地元の皆さんによる、よさこいソーラン踊りやフラダンス舞踊などが行われ、観客を魅了します。また、吉沢小学校金管バンドの迫力ある演奏が、会場を一層盛り上げます。

この祭りに欠かせないのが、みんなで一緒に踊る「よしざわ音頭」と「よしざわめぐり」。歌詞は公募で決定し、地域の地名や風景を折込むことで、風情があるものになりました。

「みんなが校庭いっぱい広がって、一つの輪になって踊る姿を見ると、交流の輪が広がっていることが実感できます」と地区会長の笹沼進三さん。子どもたちが楽しみにしているこの祭りを、これから先もみんなが支え合って続けていきたいと考えています。

昨年は、大震災の影響で中止を余儀なくされました。今年は、その分も含めて、たくさんの笑顔が集まることでしょう。

問合せ 吉沢市民センター(☎247-1989)

※今年は、8月26日(日)に開催されます。



左から鬼澤正明さん、笹沼進三さん、有川忠司さん

みんなの橋ものがたり

第2話

水戸にかかっている橋の名前の由来やエピソードなどを紹介します。

水府橋(すいふばし)

水府町・那珂川の橋

近代都市・水戸のシンボルとして、存在感を放ち続けていた名橋が、静かに役割を終えようとしています。

水府橋は、世界的大恐慌に見舞われた昭和の初期、政府の失業対策事業として1日300人の作業員を雇用し、わずか1年足らずの工期で、1932(昭和7)年5月に完成しました。

車道の両側に設けられたそれぞれ幅2mの歩道は、橋梁に歩道を設ける概念のなかった当時には画期的なこと。時代の先を見越した設計を手がけたのは、東大工学部出身の中間友義(当時28歳)という青年でした。

昭和・平成にかけて幾多の洪水にもめげず、幹線道路の役目を担っていた水府橋ですが、周辺の築堤工事が進み、現在は橋の架け替え工事が行われています。

高速道路などの新しい橋を除けば、那珂川に架かる茨城県内の道路橋のうち、完成当時の状態で残っているのはこの水府橋だけと言われます。新旧の水府橋を同時に見ることができる今、那珂川の流れを眺めつつ、80年間の水戸の歴史に思いをはせながら悠々と渡りたいものです。

— 水戸まちづくりの会 —



重厚な親柱も見所もひとつ